

文学史を教える難しさ 代表性に潜む問題について

土屋結城

はじめに

発表者は 2012 年から実践女子大学文学部英文学科で 18 世紀ロマン派以降のイギリス文学史をカバーする「イギリス文学史 b」という科目を担当している。この科目は、「教職課程認定申請の手引き」において示されている「英語科に関する専門的事項」のうち「英語文学」のカテゴリーのコアカリキュラムであるため、「英語文学」の科目が到達すべき目標及び学習内容を取り上げることが意識し、授業を展開している。その学習内容の中で最も難しさを感じるのが「英語で書かれた代表的な文学」を取り上げることである。本発表では、発表者が特に困難を感じる二つの問題を発表者同士、並びにフロアと共有し議論することを目的とした。

「英語書かれた代表的文学」に見られる偏り

発表者が提示した問題の一つ目は、「イギリス文学史 b」の授業で解説する 25 人の作家のうち、男性が 20 名、女性が 5 名と偏りがある点である。この偏りの原因の一つは、授業担当者個人の偏重というより構造的な問題であろう。日本で流通しているメジャーなイギリス文学史の教科書で取り上げられている作家の男女の数を調べると、多くの教科書で男女比が 10:1～5:1 ぐらいで男性作家が多く取り上げられていた。授業内容もこの傾向を反映してしまっている。

いまひとつの原因は、本学の英文学科に女性作家の文学作品を取り上げる授業があるため、発表者がこの授業との差異化を意識している点が挙げられる。このように「イギリス文学史 b」の授業内容の偏りの原因として構造的な問題と本学独自の問題の二点を挙げられるが、とは言えこれでいいのかという悩みを抱えている。

“Teaching Dangerous Subjects”

悩みとして抱えている問題のもう 1 つは、Elaine Showalter 言うところの“teaching dangerous subjects”の問題である。「英語で書かれた代表的な作品」にはしばしば受講生の何らかのトラウマを呼び起こす可能性のある場面が描かれるからである。実際に「イギリス文学史 b」が 5 限に開講されていた時に、宮本亜門演出、多部未華子主演の『サロメ』の録画映像を見せていたが、その際に学生から「授業後、（人通りの少ない夜道を）帰るのが怖かった」と言われたことがあった。この学生はトラウマになるほどショックを受けたわけではなかったようだが、似たような感想を持った学生は他にいたと思われる。

このように扱いに気を付けるべき教材を扱うときどうすればよいか。Showalter は *Teaching Literature* の中で“*One important principle is candor and clear labeling – telling students in advance that they may be offended or upset*” (126) と述べている。

さらに、Showalter は Martha Nussbaum が言ったことを引用しながら、次のように主張している。

Martha Nussbaum points out that “many courses in criminal law do not address rape for precisely this reason, and those that do exercise special care to promote a sensitive atmosphere in classroom.” Literature professors should not feel like wimps if they do the same. (130)

Showalter や Nussbaum の指摘はもつともであり、何らかの危険性を含んでいる場面を読ませる、あるいは見せる場合には事前に通達するなどの配慮が必要であろう。

しかし一方で、このような場面を見せた時に学生の間で失笑のような反応が起こる点を、本発表ではより掘り下げた。失笑が起きるのは、表現が大袈裟に感じられるから、あるいは何らかのショックを受けた反動だと思われる。似たような失笑、苦笑のような反応は『テス』において、テスがアレックを刺し、アレックの血が床を伝って階下に落ちる場面でも起きる。やはり同様に大袈裟に感じられるのではないかと思う。本発表ではそのような反応を問題視したいのではなく、この二通りの反応——ショックを受ける場合と失笑してしまう場合——についてさらに考察した。

この二つの反応とは、換言すれば George Steiner が critic と reader の違いとして提示したものに近いのではないだろうか。Steiner は自身の論文において、critic とは対象から距離を置いて対象を objectify できる者のことであると繰り返し指摘している。

The critic argues his distance from and towards the text. To “criticize” means to perceive at a distance, at the order of remove most appropriate to clarity, to placement (F. R. Leavis’s term), to communicable intelligibility. The motion of criticism is one of “stepping back from” in exactly the sense in which one steps back from a painting on a wall in order to perceive it better. (423)

一方の reader はそれと対比されており、対象＝テキストにより近く関わる者のことを指している。

the reader’s engagement with the text is not “objectifying,” . . . it cannot be a relationship of reification, of competition, and, by logical extension, of supersedure. The reader opens himself to the autonomous being of the text. The dialectic of encounter and of vulnerability (the text can bring drastic hurt) is one in which the ontological core of the text, its presentness of inward being, both reveals and makes itself hidden. (441)

この引用箇所では、Steiner は、reader と text とのかかわりについて述べているが、その指摘の中で reader の vulnerability の可能性に言及している点が注目に値する。読者が無防備に何らかのテキストと関わってしまうことが孕む危険性が示唆されているのである。

そして恐らくこの critic と reader の二項対立は今もアカデミズムの場で見られるだろう。Elaine Auyong は、literary studies のフィールドでは作品に没入してしまう反応は“naïve, nonintellectual, even regressive”であると見なされると指摘している(“Introduction”)。さらに Rita Felski は同様の反応について、“a felt closeness to a work of art will hamper one’s ability to analyze it. . . Emotion and seduction, then, as the antitheses of criticism”と指摘している (“Chapter 4 Interpreting as Relating”)。先ほどの Auyong と同様、作品に肯定的に没入する感情について述べているが、作品からショックを受ける場合も感情の強さと言う意味においては同様だろう。

つまり、ある場面においてショックを受ける可能性がある学生がいる場合、Showalter や Nussbaum が主張するように、十分に注意をする必要があるが、一方で失笑するぐらいの学生の方が良い critic になる可能性があり、この点において、教室内に一種のダブルスタンダードを生じさせてしまっているのではないかと、との責任を感じるのである。ショックを受けるタイプの学生には気を遣うけれども、それと同時に、そのような学生たちは良い critic にはなれない、と言わんばかりの暗黙の雰囲気や教員が作り出しているのではないかと、そして、それを契機に教室内に小さな分断を引き起こしてしまっているのではないかと懸念を持つのである。

何らかの作品に対して強く感情を持つ受け手がいることを念頭に置いた上で Felski が推奨しているのは、次のような教育である。“Our task is not only to teach them to interpret but also – if we want to see them again in our class – to make them care about what they interpret, to become affected and invested.” (“Chapter 4 Interpreting as Relating”) これは、いわゆる「推し」について論じる方法で、既に日本の教育の場でも実践されているだろう。一方で、拒否反応を示してしまうような作品との対峙の仕方というのは難しい。Nussbaum が言ったように、special care で扱うべきというのが最適なのだろうが、ある程度大人数のいる授業では一人一人の学生を十分にケアすることができない。では、そのような面倒を排するためにも、“dangerous”な作品については授業では取り上げないのでもいいのかということとそれも極端である上、「英語で書かれた代表的な文学」を排除してしまうわけにはいかない。このような問題も含めて“dangerous subjects”の適切な扱い方についてどうあるべきかという問題を投げかけ、発表者同士並びにフロアと共有した。

引用文献

Auyong, Elaine. *When Fiction Feels Real: Representation and the Reading Mind*. Oxford UP, E-book ed., 2018.

Felski, Rita. *Hooked: Art and Attachment*. U of Chicago P, E-book ed., 2020.

Showalter, Elaine. *Teaching Literature*. Blackwell, 2003.

Steiner, George. “‘Critic’/‘Reader’.” *New Literary History*, vol. 10, no. 3, 1979, pp. 423–52. JSTOR,

<https://doi.org/10.2307/468921>. Accessed 28 May 2025.